人生後半期の人に目的提供

2012.11.13

まなぶ　小グループでの学習

小グループでの学習の有効性は、多くの人が経験しているはずだ。何人かが集まれば自分とは違う意見やアイデアが出され、考え方には幅が出て、対処方法に選択肢がもてる。成果だけでなく実はこのプロセスが重要なのだ。

最近、「教わる」から「学ぶ」へのシフトのカギを握るのも、このグループでの学習形態ではないかと考えるようになった。とくに人生の後半期に入った人々にとっては有効ではないかと。

PBLと呼ばれる学習者中心の学習方法がある。Pはproblem（問題）またはproject（作業課題）の意味で、BLはそれに「基づいた学習」のことである。

「問題」型は専門教育の代表格である医学教育の方法としてカナダで開発され、患者例を提示してどこに問題があるかを学生に見極めさせていく。知識は系統だって与えられるのではなく、問題解決の必要性から学生が選択し、学習する。転じて、問題を自分たちで発見するところから始まる学習方式をいう。

「プロジェクト」型は課題設定に比重をおく。共通するのは、結果に向けたプロセスの重視で、これに適しているのが小グループという点である。

さて、学校や企業などで経験するグループ作業と、仕事や家庭での役割を離れた人たちによるそれでは、学習の「目的」のあるなしという違いがある。学校は教育の枠組みの中にあるし、企業での目的は言わずもがなである。

人生後半期の人々はそれまでの経験からグループ学習のスキルは身につけている。しかし、今度は目的が与えられないのだ。それまでの社会的責任から解放された結果ではあっても、自由に目的を設定することは未知の経験に近いかもしれない。似通った境遇の人はたくさんいるはずなのに、横のつながりが希薄な現実がある。

推奨すべき生き方を示すのではなく、発想を逆転させて彼らがグループ学習を通じて目的を検討できる環境を提供しよう。これからのライフスタイルや社会的活動を創出する力は備わっている人たちである。答えを教えるのではなく自分たちで見つけるPBLの神髄が活かせる。

では、どこにその場を求めるか。浮上してくるのは社会的資源としての高等教育機関で、その次世代的役割と考えられる。

（立教大教授　木下康仁）